

農楽部 畑っこ

廣山真菜 原睦子（環境人間学部 食環境栄養課程 2 回生）

キーワード：農業，在来種，無農薬，多世代交流，地域交流

1. 団体概要

農楽部 畑っこ（以下、畑っこ）は、姫路環境人間キャンパス内にある畑で毎週水曜日に活動している学生団体である。

「農を楽しむ」をコンセプトに、地域の方々の協力を得ながら、単に野菜を栽培・収穫することを目的とするのではなく、採種して次年度につながるサイクルを通じて「在来種を守る」ことを目的としている。また、伝統的な農法も活動を通して継承しており、昔ながらの農具を使った種まき、収穫・採種、そして調理して食べるまで、食の一連の流れを体験している。その過程で、「鎌と鍬さえあれば食べていける」という知恵を学んでいる。

本年度は、2回生9名，1回生12名で活動した。以上に記したような例年の活動に加え，本年度は地域の多世代の方との繋がりを重視した活動を行った。近年の都市化に伴い，農業ができる環境が身近にない人が多い。そのため，小学生や学生が農業に触れ，知識を付けることのできる場の提供や普段目にすることが少ない在来種の農作物ならではの良さや魅力の発信を行った。

2. 2025 年度の活動事例

本年度の主な活動内容を表 1 に示した。毎週水曜日の活動では、畝づくり，種まき，草引き，水やり，収穫・採種を主に行った。

また，本年度は学祭（エコフェス・工大祭）で模擬店の出店や食育ひろば，農家の方との交流，餅つきなど地域との繋がりを意識した活動を行った。

2.1 学祭（エコフェス・工大祭）

姫路環境人間キャンパスで行われたエコフェスで，模擬店を出店した。私たちが栽培したじゃがいもを用いたハッシュドポテトを調理し販売した。

姫路工学キャンパスで行われた工大祭でおさつチップと麦茶ラテを販売した。サツマイモは私たち

表 1 2025 年度の活動事例

	収穫した農作物	イベント
春	ソラマメ， サヤエンドウ， ニンニクの芽， 大麦	新入生歓迎会
夏	トマト， キュウリ， ナス， ピーマン， トウモロコシ， ブドウ， じゃがいも， ミョウガ	学祭（エコフェス）， 梅ジャム・梅シロップ・梅ジュース作り， 食育ひろば
秋	イチジク， サツマイモ， もち米， 鶴首カボチャ	農家の方との交流， 学祭（工大祭）
冬	キクラゲ， 大根， 人参， 小松菜， 水菜， みかん， 鶴首カボチャ	環境人間学フォーラム， 餅つき

（出所）執筆者作成

が栽培したものとひょうごの在来種保存会の農家の方に頂いたもの、大麦は私たちが栽培したものを用了。



写真 1 (左) エコフェスの様子



写真 2 (右) 工大祭の様子

2.2 食育ひろば

兵庫商品開発プロジェクト DEN と共同で 2025 年 8 月 4 日，5 日の二日間で「食育ひろば」を開催した。当日は 4 名（4 日），7 名（5 日）の計 11 名の小学生が参加して下さった。当日の内容を以下に記す。

①大麦と宍粟三尺についての紹介・説明

②脱穀体験，宍粟三尺の収穫

③大麦焙煎体験

④豆についての紹介・説明

⑤麦茶飲み比べ（六条大麦，二条大麦，市販の麦茶パック），豆ご飯と宍粟三尺の試食

これらの活動を通して，小学生に普段スーパーマーケットなどで目にしない麦の脱穀前の状態や在来種である宍粟三尺・豆に触れてもらい，在来種について知ってもらうことを目的とした。



写真6（左） 竹林伐採体験の様子

写真7（右） ゆず収穫体験の様子



写真3（左） 宍粟三尺収穫の様子

写真4（右） 脱穀体験の様子



写真5 食育の様子

2.3 農家の方との交流

学生団体おにぎりひろばと共同で2025年11月30日に太市の竹林見学と安富町のゆず収穫体験を行った。

竹林見学では実際に伐採体験をさせていただいた。竹を切るだけではなく、竹の葉を切り落とし、運ぶまでが1サイクルとなっており、葉を落とす作業が最も大変であると気づいた。

ゆず収穫体験ではゆずの木についているトゲに気をつけながら作業を行った。ただ収穫するだけではなく、他のゆずを傷つけないような工夫や見た目による仕分けなども行い、商品を扱うということを実感した。

2.4 環境人間学フォーラム

2025年12月3日に姫路環境人間キャンパスで開催された環境人間学フォーラムのポスター発表部門にて発表を行った。多くの方に本団体の活動や在来種について周知することができた。また、環境人間学フォーラムにおいて、奨励賞（ポスター発表部門）を頂き、今後の活動の励みとなる機会となった。



写真8 環境人間学フォーラムで発表したポスター

3. 活動を通して学んだこと

本年度は活動を通して、身近な感動に気づくことができた。私達は1年間あるいは2年間、本団体に所属することで、当たり前のように、畑を利用させていただき、農作物が種の状態から食べられる状態になるまでを日々見ることができている。

しかし、食育ひろばを開催した際に、小学生が普段見ないものに純粋な気持ちで驚き、感動し、楽しむ姿は私たちが身近な感動を当たり前のこととして感じてしまっている事実や私たちの活動の意義を感じることが出来た。特に、宍粟三尺を両手いっぱいを持つ姿、普段見ない田んぼや虫、麦を見た時の姿はとても印象的だった。



写真9 (左) 宍粟三尺を手に持ち、田を見る小学生の様子

写真10 (右) 田を整備する様子

4. 今後の展望

本年度2回生が幹部を行ったこともあり、来年度も同体制を軸に活動する予定である。しかし、現状に満足するのではなく、初心に戻り、「なぜ」や「どうして」の部分地域の方と考えを深めながら活動を行いたい。また、多様な意見を積極的に取り入れ、これまでの型にはまらない活動を行ってきたい。

様々な活動を通して、自らの知識・技術部分の未熟さや在来種に関する周知不足を実感した。まずは、自らの知見を深めつつ、さらなる在来種の周知・保全に向け努力していきたい。そのために、来年度も小学生やその他の年代の方を対象としたイベントの計画・実施を行い、地域に根差した学生団体だからこそできる五感を通じて学ぶ体験型の魅力発信を行いたい。また、本年度も行ったように本団体に留まらず、学内のあらゆる団体を巻き込んだ取り組みも積極的に行うことで、学内への在来種の周知や各学生団体の活性化を期待したい。

この学生団体から学内、兵庫県内、そして日本全国に在来種の良さが広まることを願っている。